

高軍と華々しき戦をなしては、あたら惜しき玉と散り日も夕暮の比叡嵐に來るべき復讐を誓ひ天下をして西海に五高あるを知らしめてゐたのである。

然るに昨夏天我に味方せず名知らぬ一儒子の術数にかかり、我が頼みの陣營潰え、その昔敵軍を幽鬼の嘘啼の聲とのみ聞き流し快勝の歡喜にふくれる我には、多年の宿望叶ひて誇れる敵を前にして無念の涙にむせんだのである。

あはれ霸業は南柯の夢に似て戦は勝たざるべからざる故に悲嘆は深く我には其の時より「敗將は兵を語らず」の古人の言葉にならひ早くも復讐の計畫を立てひたすら斬冤の劍をみがいてきたのである。

玲瓏たる秋の夜星影を仰いで忍ぶに耐へざる恥辱を思ひ浮べ、寒風肌をつく真冬にも休暇を待ちわびる故郷の兩親の許に歸りたき氣持を努めて忘れ冬合宿をなし、かくて春三月人々は蝶よ花よと綠酒に酔ふの時断然合宿にたてこもり、まづいかゆをすすりながら只黙つて精進の道を續け思ひ出

深き春合宿を終へここに新進氣鋭の新入生部員多數を迎へ更に雪辱の意氣は燃え上つたのである。

然し我々は未だ微力である。新入生に有力選手を得たと一言へ、二年三年は數ふに足らない。じみで苦しい部から華やかな部へと移行行くのは人情の常で致し方のない事ではあるが、毎年／＼少くなりつつある柔道部に踏み止り去り行くものの後ろ姿を眺めなければならぬのは何に例へ様もない淋しみである。然し去るものは敢て追はず只熱情の士のみ例へ少くとも最後迄止り向う上の道に進むのも又男子としての本懐である。練習の苦しさに取衣のすそをかんで泣き出したくなる氣持、頭に白い綿帯に血の赤く浸んだまま黙々と練習してゐる時の氣持、苦しいには違ひないがそこに又人生の醍醐味愉快さがひそんでゐるものである。

光輝ある歴史に汚點を印し五高柔道部も今や凋落の悲運に向ひつつあると言はれても致し方はないけれども、我々のこの苦しい努力だけは認めて呉れると信じて今から一

致協力し犠牲心並びに團結力の美しき養成に努力せば内面的缺陷を掩ひ得べく夜を日に次いで猛練習をなさば必ずや期待に沿ひ得るチームを作り得る事と思ふ。餘す所僅に二ヶ月である。梅雨頃の練習の苦しきは部員ならでは味ひ得ない事だが我々は如何に苦しくとも又如何に泣きだしたい事があつても笑つて運命に服従し人々が暑さに隋眠をむさぼる時、ひたすら無言の意氣にお互が結び合ひ胸にひめた誓へと邁進を續け今年こそは昨年の恨を晴らし「薩摩隼人」の部歌を京洛の地に高く唱へんものと固く決心してゐる次第である。

今春敗憐の心を懷き萬事を我々に託して淋しく龍南の天地を去つて行つた幾多の先輩の事を思ふ時我々はじつとしておられない氣持に襲はれ復讐の心益々切なるを覺ゆるのである。

端艇部報

彼のストローク、激浪くづれかゝるときなほ強く、

高き樂の調子もて、
逆巻く浪をかきくりり行けばなり
實に彼が強きストロークこそ、

王のみ前に奏でらる、勝利の曲にも擬ひ
つ、

權辭かに働かせて

白き泡鋪ける海の床をば眞一文字にやり
にけり。

舟は打顛ふ長き軸を波のまげ目に

高くあげてなほ一漕

強き樂の音に合はずが如、

權並揃へ、心は高く昂りつ、

しぶき濡れて、なほ漕きやりぬ。

漕艇の妙味は之である。感激を以て、意氣
を以て、忍耐を以て水底より湧き來る微妙

な樂音を享樂しつ、漕がれば嘘である。か

ゝる域に達するには努力、超人間的努力を

惜しんでは駄目だ。

超人間的努力を致すには皆の心を一つに固
め一つの力強い融合体を以て當らねばなら

ぬ。

是に合宿の必要が生ずる。

四月八日市内黒髮町坪井に合宿して超人
間的努力の第一階梯を踏む。練習は愈意識
的になつて來た。

バック臺五十本、百本、百五十、二百、
二百五十、三百本。此頃から苦痛が伴ふ。

苦痛が伴ふと共に忍耐力が増して來る。常
に緊張した精神、唯一の武器は之より外に
ない。

この武器を磨くために四月廿九日、卅日、
一日の三日間に亘つて島原——三角に遠漕
を行ふ。

九時艇庫出發

合流點——宇土 九時十五分……十時廿

五分

宇土——海上一里半 十時五十五分——

十一時卅五分

海上一里半——海上四里 十一時五十分

——十二時半

海上四里——島原港口 一時五十分——

三時

翌朝九時半島原出發 三時三角着

その翌朝潮に乗て出發、三角本港迄無事な

一(益)一

りしも港外波浪高く漁夫に尋れば航行危
険なりとのこと、前年の沈没を思ひ出し水
上署に船をあづけて鐵路熊本に歸る。運賃
支拂ひ、あはれにもおかしき思ひ出の一片
である。

五月廿四日川尻合宿、最後の練習舞臺に
入る。

川尻滞在中こそ超人間的努力の極盛期で
ある。

午后四時出艇、七時上陸、バック臺、風

呂、夕食、散歩、勉強(う)就寝、

猛練習と試合切迫とのためか選手一同氣

狂ぢみて來る。バック臺を引くときの惡鬼

のやうな形相、棒を引くときの断末魔の狼

のやうな唸り聲、何事ならんと集つて來る

人で合宿の前は黒山である。人が見てゐる

と皆ヤケクツで益々妙な唸り方をする。意

識的に氣狂になつて行くやうな氣持だ。世

間とは没交渉になつて來る。之は結構なこ

とだ。

炎熱日に加はり艇体焼くが如く河水沸く

が如き六月の練習は見榮を張らずに正直な

所を告白すれば殺人的である。最大の苦痛は最大の快樂である」と云ふが最大の苦痛を追憶するのが最大の快樂であつて、苦痛は常に苦痛である。苦痛を快樂と思へと云つても苦痛を快樂と思つたらそれは既に苦痛ではない。苦痛を苦痛と感じない者が如何にその苦痛に耐へてもそれは決して偉とすべきではない。苦痛と感じてそれに耐へてこそ始めて偉とすべきであらう。

ともかく苦痛を追憶することは一の優越感を伴ふ快樂であることは事實だ。

苦しい／＼と思ひながらそれを征服し抑へて行く氣持は過激な運動に従事する者の特權であるとも云ひ得よう。漕艇は如何に上達しても苦しきから脱することは出来ぬ。否上達すればするほど苦しみが益々増加して来る。完全なオールを引かんとすれば体の各部を細心の注意を拂つて動かさねばならぬからである。完璧へ完璧へと不斷の努力を拂つてゐるうち飛陽吾を待つことなく一學期の試験もどうか片付け試験の日は追つて来た。水を打

つオールの音も戰闘的に響く。

七月十日(試験終了の日)ガンツ、フライハイト(全休)

此の日の休々は疲れ休みではなく翌日に備へるのである。

七月十一日河口迄一氣に無休で漕ぎ下る。合宿より合流點迄ウォーミング、アツプ。

「TAKEROAR」の聞と共に一時間後は貧血でぶつ倒れるものを覺悟してオールを握る。

蜜柑より宇土へかゝるまきオールの力は非常に弱つた。

併し皆最后迄漕ぎ終つた。練習の賜である。所要時間四七分。航程二里半。

七月十三日愈々遠征出發。瀬戸内海を経て石山に十四日到着石山には二高四高高知既に來てゐる。

松江を殿として廿日には全部揃ふ。彼等に敵愾心を感じるよりはむしろ懼しさを感ずる。が男と男との對立には毫も妥協は許されぬ。約束されてゐるものは唯火の出るやうな戦である。戦ふ以上は勝たねばならぬ。

勝利の甘酒に酔はんためではなく意氣地のために勝たねばならぬ。友誼は友誼、意地は意地。各校の選手意氣正に激昂、唐橋上はスパイ連で一杯だ。我軍のタイム五分卅秒臺を保持す。決戦の日は遂に來た。

七月廿七日午前獨漕、タイム五分卅四秒。二高の五分卅二秒を第一位として第二位。

午後。對高知高校戦。彼は五高第一回遠征以來の強敵である。相手に取つて何の不足があらう。

兩軍極度に緊張してスタートに就く。我に取つて彼強敵ならば彼に取つても我は強敵。舷々相摩す大接戦は、固より覺悟の上である。兩軍のコンデイション、意氣に於て優劣無しとせば結果は全然豫想を許さぬ。

然るに噫又々破綻が我に生じた。恐れてゐたサイドの不公平而も不利な石山サイドを取らねばならんとは。意氣に於て我に缺けてゐた所もあつたらうが矢張最大の敗因としてサイドの不利を採らねばならぬ。

我は戦つた。サイドの不平をオールの先で晴らしながら萬一不運に合ふとも敗れて悔

なき戦を戦はんとために。

微かに敵の舵手の聲が前方で聞へる。追漕又追漕死んでもゴールに入る迄には抜き返さればならなかつたに。「又しても敗れた。」女々しいと思ひながら滲み出る涙はどうすることも出来ぬ。嗚咽の聲が艇内に洩れる。「五高は若い」の屈辱的批評も尙甘受せればならぬか、噫!!! (平岩筆)

野 球 部

△昨年度に於ける
試合の二三。

熊本高専リーグ戦 對高工戦

五月十八日五高高工藥專三校選手武夫原に集ひ、ダイヤモンド一周前年の優勝校五高側より優勝盃返還濹洲校長の挨拶あり終つて戦の幕は切つて落された。

五高は(一回)島田の安打ありしのみ。(二回)凡退(三回)中野の安打下川の本壘打に二點(四、五、六回)無爲(七回)磯部下川の安打島田の三壘打栗田のバントに三點計五點を得しに反し高工は(一回)一點

(二回)三點(三、七回)に各々一點計六點を得て一點リードされたま、第九回に入り下川死球島田安打に續き栗田と江藤のバントに同點と思はれしに江藤のバントを敵投手がノーバウンド捕りたるか又はワンバウンドなるかに就き審判決定を下す能はず此處に紛争を生じ其後の交渉もまとまらず一時中止の形となつた。

西部豫選出場記

炎熱の武夫原に約二ヶ月血と涙を流した猛練習に依り大いなる自信を得た我々は覇氣満面一路福岡に乗込んだ。七月十六日先づ山口高商を向ふにまわす。

五高。一回島田遊越安打に出たが佐々木の投筒に封殺されど栗田二壘江藤の右前安打に先づ一點。(二三四)無爲(四回)磯部の安打のみ(五回)栗田遊筒失に出て捕逸及び暴投に又一點(六回)下川中野四球中原山内島田の集中安打に更に二點を増し(七回)佐々木の安打のみ(九回)栗田の安打のみ計四點を得たるに反し山商は一回八回に各一點を得たるのみにて、我軍先づ山陽のダークホ

一(六)一

イスを槍玉にあぐ。

對福高戦

五高(二回)磯部四球下川二壘打中原四球にチャンスあつたが惜しくも逸し(三回)島田栗田の安打あつたが後者凡退。(四回)チャンスあつたが入らず(五回)島田の安打のみ(六、七八回)無爲(九回)敵失と四球に一點を得しに反し福高は(二、三回)に各一點を得結局二對一にて我軍恨を呑む、蓋し福高を弱敵と見て輕んじた結果此の苦杯をなめしなり。

△本年度野球部の近狀

本年度の我野球部は主將江藤投手を一人送るのみで甚だ有望と思はれたが好漢磯部病に倒れ幸ひに多數の名選手を得しに拘らず家事上の都合其他で入部しねざる者多く結局現在では新選手は津田(文一乙)池田(理一甲二)二宮(理二甲二)島田(文一甲二)鷲尾(文一甲二)大津(理一甲二)である。本年に入り又遊撃山内病床に伏し一抹の不安を感じさせたが舊選手の多數に加ふるに如上